

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4271401558		
法人名	株式会社 日進開発		
事業所名	グループホーム「くにみの里Ⅱ」		
所在地	長崎県雲仙市国見町多比良戊1449-415		
自己評価作成日	令和2年10月30日	評価結果市町村受理日	令和3年2月8日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/42/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ローカルネット日本評価支援機構		
所在地	長崎県島原市南柏野町3118-1		
訪問調査日	令和2年12月22日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

自然環境が豊かな場所で、近隣には県立百花台公園やフラワー公園、車で30分圏内に雲仙と季節に応じ外出支援を行っている。その中で働く職員も、笑顔とまごころをもって入居者へ安心と尊厳が守られた中で支援を提供している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

ホーム敷地には同法人の通所介護事業所及びグループホームがあり、行事や職員勉強会を合同で実施するなど協力関係を構築している。ホームは自治会に加入し地域住民とのコミュニケーションを図るほか、入居者が近隣小学校からの招待で運動会種目に参加したり、卒業式には入居者手づくりの作品を贈呈するなど日常的に交流を深めている。また、ホームに隣接する農家の方から大根をもらったり、入居者の離設(施設を離れる行為)があった場合は情報を知らせてもらうなど地域との協力関係を築いている。食事は同法人の管理栄養士による栄養面を考慮した献立表をもとに職員が入居者一人ひとりの状態に合わせて調理し提供しており、BGMとして演歌を流しながら本人のペースで食べられるよう職員も一緒に食事を摂っている。また、テイクアウトの食事を利用した際には入居者の楽しみに繋がるようメニュー表から入居者の好きな食べ物を選んでもらうなど工夫している。今年はコロナ禍の影響で地域との交流を自粛しているが、管理者はコロナ禍が終息し次第地域との交流を再開する意向であり、今後も更なる入居者支援に期待が持てる事業所と言える。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

ユニット名 C棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人の理念を職員一人ひとりが理解し、実践につなげている。	職員は入居者の安心と尊厳遵守に努めており、笑顔とまごころを持った実践へと繋げている。ホーム理念は入職時に知らせることで新人職員への意識付けを図っており、事務所内への掲示や月1回のミーティングの際に話をする事で共有している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	新型コロナウイルスの影響で、外部との接触がないように規制をかけ交流が図れない状況。	入居者は近隣小学校からの招待で運動会種目に参加するほか、卒業式には入居者手づくりの作品を贈呈するなど日常的に交流を深めている。また、ホームに隣接する農家の方から大根をもらったり、入居者の離設(施設を離れる行為)があった場合は情報を知らせてもらうなど、地域との協力関係を築いている。今年はコロナ禍で地域との交流を自粛しているが、終息後は地域との交流を再開する予定である。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	例年でいけば、近隣の小学校や中学校の生徒を受け入れ、生徒へ福祉への理解を求めるようにしていたが、コロナ禍で中止。地域へ発信する機会がない。	/	/
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	今年度、運営推進会議が開催出来ない状況で家族や関係機関へは書面をもって報告。開催できていない分、率直な意見を聞くことができてない。	運営推進会議は年6回、行政職員・民生委員・自治会長・家族代表・職員参加のもと開催している。今年はコロナ禍の影響により書面での会議としており、入居者の状況やホームの取り組み等について家族・運営推進委員へ郵送し報告している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	コロナ禍とあって、行政からはコロナ関連の情報のやり取りが多く、ケアサービスについての情報・案内は殆どなかった。	市福祉事務所から入居の相談があるほか、入居者の各種手続きに関する相談や報告等を通して行政担当者と協力関係を築いている。また、新型コロナウイルスについて市福祉課やグループホーム連絡協議会から情報を得るなど、コロナ禍における対応等について体制を整えながら支援に取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	毎月のミーティングで議題として取り上げ、身体拘束についての共通認識をもつようになっている。	ホーム玄関は日中施錠を行わず、チャイムと見守りに対応している。ホームでは身体拘束ゼロ委員会を立ち上げ、毎月のミーティングで議題として取り上げるとともに、運営推進会議においてもホームでの取り組み状況を説明している。今回、職員の身体拘束の認識を深められるよう受講を予定していた権利擁護推進員養成講座についてコロナ禍により中止となったが、来年度は受講予定としている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	それぞれの入居者への支援の中で、何気ない事であっても話し合いを重ね、身体拘束がない支援を提供するようにしている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	今年度も権利擁護推進員養成講座を受講予定としていたが、コロナ禍とあり受講を取りやめた。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の際、一つひとつ説明、理解を求めながら説明し同意をもらっている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	今年は、コロナの影響で面会への規制をかけたため面会が無い状況だったが、感染状況をみて、一部面会を解除して面会があった際、挨拶だけで終わらず、状況報告を必ず行った。	入居者への面会については今年10月から一部解除し、面会者へのマスク着用や体温測定、手指消毒などの感染対策を講じた上でを行っている。毎月発行するホームだよりには行事を楽しむ様子を収めた入居者の写真を掲載し家族に知らせている。また、家族から意見や要望があった際は記録に残し、職員間で共有するよう努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	各棟でのミーティングや不定期の主任会議での意見や提案を施設長会議やグループの全体会議で報告している。	施設長は月1回の各棟ミーティングや主任会議で把握した職員意見について、必要に応じて施設長会議や法人での全体会議で報告することでホーム運営に反映している。電動ベッドの購入により職員の腰痛軽減や環境整備専従職員をホーム内に配置するなど、職員意見を運営に反映することで職員の負担軽減へと繋げている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は、それぞれ職員の勤務状況を把握。職場の改善や整備を行ってくれている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	今年度は、社内外の研修が全くない状況。くにみの里独自の勉強会を毎月1回実施。テーマは、各部署に一任している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	他事業所との交流する機会はなかった。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居にあたり、事前情報は収集。その後も家族の面会時などに少し掘り下げた情報を頂き、支援につなげている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	困りごとや不安が解消できるまで、施設も向き合うことで関係性を維持。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居時に家族にもどのように生活を送ってほしいか話し合いをしてから、サービス内容を提示して同意をもらうようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の出来る事、能力の持続支援を行う。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍で思うように面会できない状況、本人と家族の関りが保てるよう、定期的に電話連絡して状況を伝えたり、毎月発行の、里たよりにて写真を掲載している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	以前は定期的に知人も面会に来て、談笑したりして交流が図れていたが、面会の規制をかけ、関係が途絶えている。	昨年は家族や入居者の知人がホームに訪れた際に居室で話ができるよう配慮していたが、今年はコロナ禍により面会を自粛しており、玄関で短時間の面会とするなど制限している。理美容院は入居者が希望すれば馴染みの理美容院へ職員が同行支援をすることもできるが、現在は2か月に1回、訪問美容を利用している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	共同生活の場なので、孤立して過ごすことがないように、日中の活動時間はみんなで過ごせるように環境づくりをしたり、みんなで取り組みができることを支援している。		
22		○関係を断ち切らない取り組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居の際、次への受け入れが未確定時には家族の不安もあり、一緒に受け入れ先が見つかりまで支援を行っている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	それぞれの入居者の意思を尊重し、できる限り本人本位の介護サービス提供を目指している。	職員は入居者の表情を見ながら言葉を掛けるよう心掛けており、その中で入居者の思いを汲み取るよう努めている。入居者の表情や様子から気になった点がある場合は記録に残し、申し送りの際にその方の状態を他職員にも知らせることで入居者個々に応じた支援へと繋げている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	これまでの生活状況を維持するため、事前情報を元にこれまでの生活スタイルを持続できる環境づくり。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	申し送りや個人記録にその日の様子を記載。状態変化など特別変化ある際は色付けで分かりやすくしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月のミーティングで、モニタリング・カンファレンスを実施。その他状態が変わり早急に対応策が必要な場合は即日ミーティングを開催してプランに活かしている。	ホームでは月1回のミーティングの際にモニタリング及びケアカンファレンスを実施しており、介護計画の目標に対する取り組み状況について話し合い、計画作成に活かしている。介護計画は定期見直しのほか、入居者に状態変化があった場合は随時見直している。立案した介護計画は家族の面会の際や電話連絡、郵送等により確認してもらい同意を得ている。	介護記録にその日の入居者の様子を記載しているが、介護計画の目標への取り組み状況が把握しづらい箇所が見受けられる。職員が常に介護計画における目標を意識しながら記録を残すことで、より現状に即した介護計画の作成に繋がることを期待する。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	サービス内容に沿った個別の記録を記載。特記事項や気づきは、申し送りノートを活用。誰でも閲覧して知らなかったがないようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	出来ていたことが出来なくなってきた事に着目し、サービスの支援の方法を少し変えることで再度できるようになるためにどういった支援方法がいいか話し合い、できることを支援。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の一員として、外部の行事にも参加する機会があったが、今年度は地域との協働が叶わなかった。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	コロナ感染予防の為、受診や往診を控え、施設での生活状況や状態を主治医へ報告して、薬のみの処方をしてもらっている状況。	職員は入居者が入居前からのかかりつけ医を受診できるよう同行支援を行っており、受診の際は入居者の状態が分かるよう個人記録を持参している。受診結果は受診記録ノートに記載し職員間で共有しており、家族には入居者の病状に変化があった際に電話で知らせている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	毎週、訪問看護師が来られ、それぞれの入居者の健康管理をしてもらっている。異常時には電話にて報告して指示を仰ぐ。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	担当医や看護師、家族とも情報を共有して、早期退院へ向け協働している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	契約時には看取りの説明を行うが、終末期になる前に家族へ、看取りに関して改めて意向を伺うようにして今後の方針を協議。	入居時に看取りに関する説明を行っており、入居者の終末期には家族・医師・職員・看護師とも相談し、対応方針を決めた上で支援している。看取りに関する社内研修やグループホーム連絡協議会における看取りの事例検討会へ参加予定であったが、現在コロナ禍により参加できていない。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	法人の社内研修にて年に1回は救命救急を実施。初任者のみだけでなく、経験年数がある職員も参加して、実践力を身につけている。ただし、今年度は、社内研修も無しの状況。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を日常的に防火管理及び消火、避難訓練等を実施することにより、全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。 また、火災等を未然に防ぐための対策をしている	毎年、火災を想定した避難訓練・消火訓練を実施。訓練当日に勤務でない職員は、事前のシュミレーションに参加して救助方法を学ぶ。施設として火災を未然に防ぐ為、建物周辺の燃えやすい物は置いてないか定期的に点検している。	年3回、昼夜の火災を想定した避難訓練を敷地内通所介護事業所及びグループホームと合同で実施し、消防署から助言を得ている。訓練前には入居者の安全確保や迅速に救助するためにどうすべきか、救助に必要な道具・設備に問題はないかなど事前シュミレーションを行い、職員間で話し合っている。	ホームでは有事を想定し地震に関するマニュアルを作成しているが、防災計画は作成していない。風水害などの自然災害状況を踏まえ、地区の特性などを考慮した防災計画を整備することが望まれる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	法人のモットーとして、「笑顔とまごころ」をかかげている。入居者への尊厳を遵守。	ホーム内の職員勉強会で「接遇マナーの研修会」を開催し、職員は接遇のポイントである「聞く姿勢、入居者、家族の状態や気持ちを配慮して寄り添う姿勢が重要である」の理解に努め、支援内容の振り返りを行いながらより良い介護の実践へと繋げている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日中の活動の中で、入居者に自己決定する場面は多くあり、職員本位でなく、まず入居者の意思の確認をしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入居者それぞれのペースがあるため、個々の意思・尊厳を守る為、状況を考慮して、その時に合った支援をしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入浴や外出支援の際、入居者に衣類の選定をしてもらっている。決定できない入居者へは、補助でこれはどうですか？たずねて最終時の決定をさせていただいている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食材のしのごしらえや、出来上がった料理を器に盛り付け等、出来る事を継続支援している。食後の盆拭きや食器拭きも出来る限り、入居者にさせていただいている。	同法人の管理栄養士が立案した献立表をもとに、入居者の状態に合わせて職員が調理し提供している。食事の際にはBGMとして演歌を流し、本人のペースに合わせて職員も一緒に食事を摂っている。また、テイクアウトの食事を利用した際には入居者の楽しみに繋がるようメニュー表から入居者の好きな食べ物を選んでもらうなど工夫している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	入居前にある程度嗜好調査しますが、経年と共に嗜好が変わる為、摂取状況を観察して、変化があるとその都度対応をする。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	週に1回は提携歯科に訪問診療していただいている。毎食後は、それぞれの居室にて口腔ケアを実施。口腔内の清潔維持に努め、異常を発見したら訪問診療の際、状況報告を行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	日々、排泄チェック表に記載してパターンを把握できるようにしている。車椅子の入居者であっても、極力トイレにて排泄できるよう支援している。	職員は昼夜排泄チェック表を記録し、その方の排泄パターンに応じてトイレへ誘導し排泄できるよう支援している。夜間帯は1名の方がポータブルトイレを使用しており、排泄を支援している。ホームでは毎年業者によるベッド上でのオムツ交換の仕方やベッドに臥床した状態でのシーツの交換などの研修を実施しており、オムツや尿取りパットの種類等を学び支援に活かしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘にならなよう、水分摂取量と運動に着目して、1日の水分量の把握と食事前に廊下にて歩行訓練を実施している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	その日の体調や機嫌を考慮して声かけの工夫。入浴が出来ない状況があり何日も入っていない方へは、更衣と清拭を実施している。	ホームでは週2～3回を入浴日として設定しているが、一番風呂に入りたいと希望する方の要望に応えるほか、午前や午後の入浴、毎日の入浴を希望する方などへの入浴支援など柔軟に対応している。日曜日には重度の方が湯船にゆっくり浸かれるよう隣接している通所事業所の機械浴で入浴できるよう支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中は出来る限り活動し、夜間にぐっすり眠れるようにしている。ただし、年齢や体調などで、居室にて傾眠していただくこともある。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬を管理している職員の都合で、薬を追加したり、減らすようなことはせず、事前に主治医の指示を仰ぐようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	さまざまな取り組みをして、興味示すものがある物は継続支援を行う。施設内で過ごすのではなく、外出機会を増やし気分転換の機会を予定していたが、コロナの影響で全てが実施できなくなる。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	前項でも記載したが、家族の面会や外出、地域との関りが叶わなかった。	コロナ禍により外出制限を行っていたが、10月には一部制限解除になり、久しぶりに地域のフラワー公園へドライブに出掛け、コスモスやサルビアの花を見学することができた。また、入居者はホーム敷地内にある菜園に植えた芋を職員と一緒に収穫し楽しんでいる。好天時にはホーム玄関先にあるベンチで日光浴をして気分転換ができるよう取り組んでいる。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	全くお金が手元に無いのも不安に繋がる為、家族に了承いただき、少額程度は自身で管理できるように所持していただいている。ただし全員ではない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話や手紙が届くと開封前に本人へ渡して一緒に開封。読み聞かせたり、電話では、職員が取次して入居者の代わりに対応している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には個人の馴染みの品物を持参して頂いており安心感が持てる空間づくりをしている。	ホーム玄関の入口や廊下の窓際には季節の花を植えて季節感を取り入れており、職員がキッチンで料理する音や匂いから生活感のある家庭的な雰囲気を感じることができる。畳の間やリビングにはクリスマスツリーやクリスマスの歌詞を掲示し、入居者がクリスマスの歌を唄ったり、好みのカラオケを披露するなど楽しんでいる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	利用者同士で過ごせるよう、くつろぐ場所で懐かし曲を流しリラックスできる環境をつくっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅で使用していた毛布や枕。家具等も持ってきて活用している。	居室の表札に入居者の写真を貼り、避難時に誰の部屋なのか判別し、表札を裏返して避難済みであることが確認できるよう工夫している。居室には入居者が使い慣れた枕や毛布、テレビ、家族写真、整理筆筒、観葉植物、冷蔵庫等を持ち込み、入居者が居心地良く過ごせるよう工夫している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	それぞれの入居者の身体機能に合わせ、安心できる空間づくりをしている。		